

表袴・大口・長袴の被服構成学的検討

A study on clothing construction of Uenohakama・Oguchi・Nagabakama

岡 寛子
Hiroko Oka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：装束，袴，襠
Key words：Court costume, Hakama, Machi

1. 研究目的

これまでに衣服の時代的変遷やその特徴を縫製面から明らかにした成書や論文は幾つか見られる^{1)~6)}が、いずれも縫製技法について論じられたものであり、何故、そのような衣服形状になったのか、装束を構成している各部位の布にはどのような役割があるのかは記されていない現状にある。そこで本研究では、男子装束である束帯の下衣「表袴・大口袴」と、女子装束の唐衣裳の下衣「長袴」のそれぞれ特徴的な形状をしている「襠」の部分に着目した。そして、これらの装束の製作を通して縫製技法と着装方法を理解した上で、現代の馬乗り袴には見られない、特有の直線裁ち布の「襠」について、どうしてそのような形状になったのか、それぞれの「襠」にはどのような役割・機能性を有しているのかを考察し、日本古来の直線裁ちによって衣服を構成する優れた縫製技術を後世に伝えることを目的とした。

なお本研究は、今まで論じられていなかった平安装束の「襠」について被服構成学的な観点から考察する点に独自性がある。

2. 研究実施内容

本研究ではまず、平安時代の男子装束である束帯の下衣「表袴」と「大口袴」、女子装束である唐衣裳の下衣「長袴」の縫製技法を調査した。調査方法は先行研究^{1)~6)}に記されている縫製技法をそれぞれ比較し、各装束の特徴を捉え、その後、本学が所蔵する「表袴」「大口袴」「長袴」の実物大の資料をそれぞれ人台に装着させ、襠布の観察を行った。その結果、それぞれの「襠」の形状は、図1、図2および図3に赤色で示したような形状になっていることがわかった。

また、現存する「表袴」について、その形状や寸法の整理を行ったところ、表1のような結果となった。このことから、「表袴」は時代に関係なく、各部寸法は統一されていないことがわかった。一方で、共通点としては「返り襠に刺し飾りが施されていない」点や、「裾口や返り襠におめり(図4)がある」点、「返り襠が2本ある」点という特徴が多い「表袴」に見られた。

次に既述した特徴を考慮しながら、実験者本人の身長に合った寸法で「表袴」の製作を行い(図5)、「返り襠」の製作面での効果について考察した。装束の製作には通常、「二重織物(二重織物)」と呼ばれる布地を使用するが、入手することができなかったため、

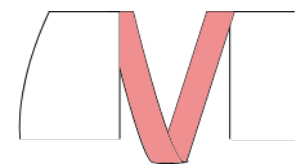


図1. 表袴の襠(返り襠)

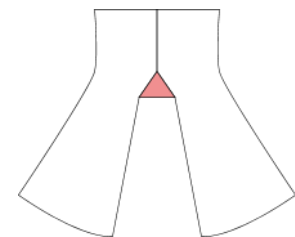


図2. 大口袴の襠(角襠)

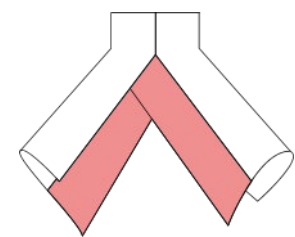


図3. 長袴の襠(捻じり襠)



図4. おめり(裾部)



図5. 製作中の表袴

厚手の綿の洋服地を試料布として用いた。製作方法は、『女子装束の裁縫について(第1報):長袴』⁶⁾に記載されている手順に従った。製作の結果、「返り襠」の裏地と表地を縫い合わせたり、刺しを施さないことで、「極力、布に触れないようにして縫製する」という装束特有の仕立て方を守り、さらにその上で、おめりを出

すことによって、最大限に装束としての格を上げているのではないかと考察できた。

さらに、本学図書館(千代田)にある平安時代に描かれた絵巻物集^{7)~10)}より「表袴」を着装した場面を抽出した結果、「直立」「胡座」「貴人座」「投げ足」「片膝立ち」「歌膝」「正座」「跪座」「しゃがむ」「お辞儀」「乗馬」「椅子座」「弓射」という13種類の姿勢に分けることができた。この13種類の姿勢を本学が所蔵する「表袴」を用いて再現し、「表袴」の「返り襠」が、着用時にどのような効果や機能性を発揮するのかを考察した。

その結果、「返り襠」は表地と裏地を縫い合わせ

たり、「刺し」を施していないことから動作を行った際に表地と裏地がズレて広がり、股部を隠すことへの効果があることが分かった。

3. まとめと今後の課題

本研究は、それぞれ特徴的な形状を有している装束の「襠」について、その形状が持つ役割や効果があるのかを明らかにするため、「表袴」「大口袴」「長袴」についての縫製方法を調べ、それぞれの「襠」の形状を調べた。また「表袴」については、現存している試料の形状や寸法を整理し、実際に製作や着装を通して「返り襠」について、その役割や効果を考察した。その結果、「返り襠」は地と表地を縫い合わせたり、刺しを施さないことで、「極力、布に触れないようにして縫製する」という装束特有の仕立て方を守り、さらにその上で、おめりを出すことによって、最大限に装束の格を上げているのではないかという制作面での効果、そして、表地と裏地を縫い合わせたり、「刺し」を施していないことから動作を行った際に表地と裏地がばらけて広がり、股部を隠すという着用時の役割があることが分かった。いずれにせよ、「表地と裏地を縫い合わせたり、「刺し」を施さない」という製作方法がこの「表袴」の「返り襠」の役割や効果に大きく貢献していることが分かった。

また、今後の課題としては、今年度取り掛かることのできなかつた「大口袴」および「長袴」の「襠」の役割や効果について考察を行いたい。

表1. 神宝の表袴の寸法(cm)

	腰紐の結び方	紐下	腰紐丈	腰紐幅	返襠	腰紐下~膝襠	膝襠幅	裾幅	備考
①熊野速玉大社・表袴 A緯白樟唐草文固地綾	右脇	111.5	表: 417.5	表: 5.0	丈: 94.5	右: 76.5	右前: 41.0	右: 33.0	おめり 中陪
			裏: 419.3	裏: 5.4	幅: 11.5	左: 76.5	左前: 41.0	左: 34.0	
②熊野速玉大社・表袴 白窠織文浮織物	右脇	114.3	表: 402.5	表: 6.2	丈: 95.5	右: 78.8	右前: 40.5	右: 34.0	おめり
			裏: 402.6	裏: 7.15	幅: 11.5	左: 78.8	左前: 41.3	左: 34.0	
③阿須賀神社・表袴 白窠織文二陪織物	右脇	130.3	表: 413.0	表: 6.0	丈: 103.0	右: 81.0	右前: 34.5 右: 34.7 (34.3)	おめり 中陪	
			裏: 413.0	裏: 不明	幅: 12.0	左: 85.2	右後: 43.0 左: 34.7 (34.3)		左後: 42.5
④熱田神宮・表袴 白地窠織文二陪織物	脇	130.0	表: 382.5	表: 6.2	丈: 91.3	右: 87.0	右後: 40.0	右: 34.5	おめり
			裏: 387.1	裏: 不明	幅: 12.5	左: 87.0	左後: 40.0	左: 34.5	
⑤熱田神宮・表袴 白地窠織文二陪織物	前中央	127.0	表: 376.3	表: 6.4	丈: 不明	右: 87.0	右後: 38.5	右: 33.0	おめり
			裏: 383.3	裏: 不明	幅: 12.5	左: 86.5	左後: 38.8	左: 33.3	
⑥熱田神宮・表袴 白地窠織文二陪織物	前中央	126.0	表: 387.3	表: 6.0	丈: 96.0	右: 82.0	右後: 39.0	右: 35.3	おめり
			裏: 390.4	裏: 不明	幅: 12.4	左: 85.5	左後: 39.0	左: 35.3	

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「大学院生研究助成(B)」(DB2206)の助成を受けたものです。

主要参考文献

- 1) 栗原弘, 河村まち子; 時代衣裳の縫い方: 復元品を中心とした日本伝統衣服の構成技法, 源流社, 東京, pp.76-121 (1984)
- 2) 栗田澄子; 被服史からみた御神宝装束の基礎的研究, プレーン出版, 東京, pp.104-108 (2001)
- 3) 森田万里子, 前岡道子, 鈴木みち, 渋沢綾子; 束帯の構成について: 1/2 標本の製作, 杉野女子大学・杉野女子大学短期大学部紀要(25), pp.17-57 (1988)
- 4) 渋沢綾子; 十二単の構成について--1/2 標本の

製作を中心として、杉野女子大学紀要(19),
pp.1-57, (1982)

- 5) 田中孝子・橘香・村山栄子・阿部栄子他；山科流装束の裁縫について-3-表袴・大口，大妻女子大学家政学部紀要(16)，pp.79-93 (1980)
- 6) 田中孝子他・橘香・村山栄子・阿部栄子他；女子装束の裁縫について(第1報)：長袴，大妻女子大学家政学部紀要(15)，pp.61-70 (1979)
- 7) 梅津次郎；新修 日本繪巻物全集 第22巻 石山寺縁起繪，角川書店，東京，pp.2-102 (1979)
- 8) 福山敏男；新修 日本繪巻物全集 第24巻 年中行事繪巻，角川書店，東京，pp.1-108 (1978)
- 9) 小松茂美；日本繪巻大成 11 長谷雄草子 絵師草子，中央公論社，東京，pp.2-39 (1977)
- 10) 小松茂美；日本繪巻大成 20 なよ竹物語繪巻直幹申文繪詞，中央公論社，東京，pp.2-49 (1978)